

2017年5月3日

立教大学国際学術研究交流制度
2017年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	法学部・教授
	氏名	松浦 正孝
受入学部・研究科・研究所		法学部
招へい 研究員	所属・職	Senior Lecturer, School of East Asian Studies, University of Sheffield 協定の有無：全学 所在国：英国
	氏名	Seung-young Kim
招へい期間		2017年4月15日～2017年4月29日（15日間）
研究経費		479,870円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例) ○○ついて研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2017.4.15	来日。
4.18	政治学総合演習（14時～17時半）にご参加頂き、鍾 欣宏（法学研究科博士後期課程）「アイゼンハワー政権前期の台湾政策：台湾の法的地位及び国府の正統性を中心に」、白鳥潤一郎（法学部助教）『『経済大国』の苦悩：東京サミット（1979年）と日本外交』の両報告に対して、国際政治史上の観点から、理論的な問題を中心に研究指導を頂いた。会場 1104、参加者 30名。 その後の懇親会で、副総長、法学部長、前国際センター長、法学部教員らと、国際交流などについて情報交換。
4.20	政治学総合演習・政治学研究会共催「書評会：秋田浩之著『乱流——米中日安全保障三国志』日本経済新聞社、2016年」溝口聡（立教大学法学部助教）、鍾欣宏（博士後期課程学生）と共に書評報告。4限、会場 D602、参加者 20名。

	<p>合同ゼミ講演会（松浦ゼミ、倉田ゼミ、小川ゼミ、竹中ゼミ）「激動する東アジア国際情勢をめぐって」秋田浩之日経新聞コメンテーター（アメリカの視点から）と共に報告（朝鮮半島の視点から）、共同研究、講演、5限、会場 D201、参加者 100名。</p> <p>その後の懇親会で、学部学生たちの留学相談などに応じて頂いた。</p>
4.28	<p>佐々木ゼミ講演会 ” George F. Kennan and US Decisions towards Korea, 1947-1951”, 5限、講演と学生への研究指導。会場 9206、参加者 12名。</p> <p>その後の懇親会でも、夜遅くまで学生達と懇談された。</p>
4.29	離日。

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

学術研究・教育活動について

4.20の書評会では、日本経済新聞コメンテーター秋田浩之氏が昨年刊行された東アジアの安全保障に関する著書をめぐり、本学部助教、博士課程大学院生と共に、三人で書評報告と討論をして頂いた。この研究会は、主に本学部教員及び大学院生のためのものであり、法学部教員6名と助教・院生・学部特進生・学部生若干名が参加した。キム先生は、東アジア国際政治、韓国政治が専門であり、しかも『朝鮮日報』での記者経験もある。これらの観点から、ゲストの秋田浩之氏に対して、書評と問題提起をして頂いた。グローバルかつ実践的な議論を展開して頂き、教員並びに院生・特進生たちの研究に大きな刺激を頂いた。

その後の4ゼミ合同の講演会では、朝鮮半島をめぐって緊迫する中、引き続き、日経新聞の「顔」のお一人である秋田浩之氏がアメリカ取材を通じての報告、キム先生が朝鮮半島の非核化をめぐり歴史と現状についての報告をして下さった。パワーポイントを使い、ジャーナリスティックかつアカデミックな観点での理論的解説が展開され、普段こうしたジャーナリストや海外の教授による議論に触れたことのない学生達に多大な刺激を頂いた。タイムリーなタイトルでもあって白熱した会場からは、次々に熱心な学生から質問の手が上がり、両先生に的確な回答をして頂いた。

さらにその後、池袋の居酒屋に会場を移して、秋田氏・キム先生には学生たちとの懇親に臨んで頂いた。キム先生に対しては、朝鮮半島情勢や英国への留学についての質問や相談が絶えず、学生達が入り代わり立ち代わり懇切なご指導を頂いた。

4.28 の佐々木ゼミでは学部生たちに対し、ジョージ・ケナンの対韓国政策について、オフショア・バランスングの観点からご報告頂いた。学生たちからは、朝鮮戦争前後の「北」と「南」の相手国に対する見方、戦後数年間の韓国の歴史に関する質問があった。世界水準の学術に触れた学生たちには、大変良い刺激になったことと思われる。

キム先生は、ご自身の国際政治史研究のための資料収集や学術交流も、精力的にされた。

国際交流について

キム先生と法学部教員たちとの交流は、4.18 総合演習後の懇親会、4.20 政治学研究会後の懇親会、4.28 佐々木ゼミ後の懇親会や、昼食における散発的なランチなどの場で積極的になされた。立教大学との協定校であるシェフィールド大学で国際交流事業にも関わっておられ留学生を多数受け入れておられるキム先生から、シェフィールド大学及び英国大学と立教大学法学部の国際交流に関する詳細な情報提供を頂いた。それにより、今後の国際交流拡大に向けての課題などが明らかになった。また、個別の学生からの留学相談にも乗って頂き、有益なアドバイスを頂いた。

キム先生が強調しておられたのは、英国における新自由主義的な大学改革と財政難の結果、如何に大学における学術研究が危機に瀕しているか、ということであった。今後の大学や法学部のあり方について、大変多くの示唆を頂くと共に、立教大学法学部に残る良き雰囲気（キム先生は何度も何度もこれを称揚され、尊重するよう力説された）を維持し発展していくことの重要性を認識する貴重な機会を頂いた。